

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02393

研究課題名(和文) 教師集団としての超越主義者：19世紀米国知識人にもみる協働の教師教育の思想

研究課題名(英文) Transcendentalists as a Teaching Community: Philosophy of Teacher Education Practiced by the 19th-century American Intellectuals

研究代表者

高柳 充利 (Takayanagi, Mitsutoshi)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：60575877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究「教師集団としての超越主義者：19世紀米国知識人にもみる協働の教師教育の思想」は、19世紀米国の超越主義者たちを、教師の研究交流集団という観点から再考することを通じ、これまで個別の教育思想家/実践家に焦点を当て取り上げられることの多かった超越主義の教育思想研究への新たなアプローチの端緒を見出すと共に、近年の教師教育の議論において検討が必要とされている、教師間の協働・学び合いといった課題への示唆を得ることを試みた。その際、エマソン、ソロー、ホイットマン、オルコットといった代表的超越主義者が教育実践-思想をめぐりどのような知的交流を展開したのかを手がかりに、協働の教師教育の思想に着目した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、超越主義者たちが一種の教師集団を形成していたという仮説を用いて、それぞれの教育思想の生成と相互作用について考察を加えた。そのことにより、従来、個別の超越主義者の教育思想研究、あるいは集団としての超越主義思想研究という枠組みでもって論じられてきた領域に、教師集団としての超越主義者たちならではの教師教育の実践-哲学を抽出するための足がかりを形成することへとつながった。そのようにして抽出された教師教育の実践-哲学への示唆は、今日の我が国における教師教育の議論を特徴づけている課題である、協働・学び合いといった事柄への検討の観点を含意するものとなった。

研究成果の概要(英文)：This study tries to elucidate how a group of 19th-century American intellectuals called the Transcendentalists formed a community of mutual teaching and learning. The study attempts to shed new light on the research in the philosophy of education found in the Transcendentalists as a group of “teachers,” instead of philosophies that each thinker held. This approach aims to create suggestions for the current discussion on enhancing cooperation among teachers at schools. In such a process, intellectual exchanges among representative figures such as R. W. Emerson, H. D. Thoreau, and A. B. Alcott are brought into focus from a perspective that helps to outline their philosophy of teacher education.

研究分野：教育哲学

キーワード：エマソン ソロー 超越主義者 教師教育

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、超越主義とその思想家についての研究は、文学・哲学・教育学のいずれの分野においても、層の厚い成果が積み重ねられてきた。そのいずれもが、教師教育につながる視点を内包していた。文学研究においては、例えば亀井俊介は、エマソンやソローらが、文学者であったと同時に、講演をして各地を旅する「さすらいの教師たち(wander teachers)」であったことを指摘している(亀井, 2013 p. 111)。また亀井は、両名が、「教師の質的向上の援助」を目的のひとつとする全米組織「アメリカ・ライシーアム」のコンコード支部の幹事であったことにも言及している(亀井, 2013, pp. 127-129)。英国の作家 D. H. ロレンスは、ホイットマンについて「アメリカ最大の最初の教師。しかも唯一の教師」と最大限の賛辞をおくっている(Lawrence, 1923, p. 181=ロレンス, 1999, p. 329)。

現代米国の哲学研究においてはスタンリー・カベルが、かつて魂の状態の問題として扱われていた問い、すなわち自己と社会の変容という次元をめぐる議論を、「エマソンの道徳的完成主義」として再提起している(Cavell, 1990, pp. 2-3)。

教育学・教育哲学の領域においても、デューイがエマソンを「民主主義の哲学者」(Dewey, 1977, p. 184)と呼び、「成長の第一の条件は未成熟である」(Dewey, 1916, p. 41=デューイ, 1975 上, p. 74)との命題を示す際、「子どもを尊重せよ」(Dewey, 1916, p. 52=デューイ, 1975 上, p. 91)とのエマソンの引用(Emerson, 1883, p. 19)を用いたことはよく知られている。米国コロンビア大学のハンセンは、「アメリカの学者」においてエマソンが「新たな社会」——すなわちアメリカ合衆国に特徴的にみられるような社会——のなかで、教育者であるということが何を意味するかについての挑発的なイメージを、「読むこと」に光をあてつつ創り出したと述べている(Hansen, 2008, p. 7)。英国ロンドン大学のスタンディッシュはソローの『ウォールデン』を、隣人に対する言語・実践を通じたアンコモン・スクーリングであったとしている(Standish, 2006, p. 147; 152)。本邦においては市村の手によって、若き日のエマソンが学校教師としての経験のなかで葛藤を通して自己信頼に基づく自己教育の思想にたどり着いた遍歴が活写されている(市村, 1994, pp. 56-65; 109-110)。また山本は、オルコットの教師としての活動は、「超越主義思想そのものの表現形態の一つの相」であったとの解釈を示している(山本, 2011, p. 125)。齋藤は、「教師としてのソロー」が例証するのは、出立する「去る教師」であり、また「自己と言語の格闘の痕跡」を遺す教師である、と指摘している(齋藤, 2009, pp. 96-97)。

こうした研究成果をふまえ、本研究では、超越主義者たちが一種の教師集団を形成していたという仮説を用いて、超越主義者たちの知的交流に含意される教師教育の思想の生成と相互作用について考察を加える。

### [引用文献]

- Cavell, S. (1990) *Conditions Handsome and Unhandsome: The Constitution of Emersonian Perfectionism*, Chicago, The University of Chicago Press.
- Dewey, J. (1977) Emerson—The Philosopher of Democracy, J. A. Boydston (ed.), *The Middle Works of John Dewey, 1899-1924*, Vol. 3., Carbondale, IL, Southern Illinois University Press.
- Dewey, J. (1916) *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, New York, The Free Press = デューイ, J. (1975) 『民主主義と教育』(上下), 松野安男(訳)。
- Emerson, R. W. (1883) Education, H. Suzzalo (ed.), *Education: An Essay and Other Selections*, Boston, Houghton Mifflin Company.
- Hansen, D. (2008) Introduction: Why Educate Teachers?, M. Cochran-Smith, S. Feiman-Nemser, D. J. McIntyre, K. E. Demers (eds.) *Handbook of Research on Teacher Education: Enduring Questions in Changing Contexts*, Third Edition, New York, Routledge.
- 市村尚久 (1994) 『エマソンとその時代』玉川大学出版部。
- 亀井俊介 (2013) 『サーカスが来た!』平凡社。
- Lawrence, D. H. (1923) *Studies in Classic American Literature*, London, Penguin Books=ロレンス, D. H. (1999) 『アメリカ古典文学研究』大西直樹(訳), 講談社。
- 齋藤直子 (2009) 「去る教師・遺す教師-カベルによる「ウォールデン」解釈と『解釈の政治学』」矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸(編)『変貌する教育学』世織書房。
- Standish, P. (2006) Uncommon Schools: Stanley Cavell and the Teaching of Walden, *Studies in Philosophy of Education*, 25, pp. 145-157.
- 山本孝司 (2011) 『超越主義と教育-ブロンソン・オルコット思想研究序説-』現代図書。

## 2. 研究の目的

本研究では、超越主義者たちが一種の教師集団を形成していたという仮説を用いて、超越主義者たちの知的交流に含意される教師教育の思想の生成と相互作用を検討する。そのことにより、

従来、個別の超越主義者の教育思想研究ないしは総体としての超越主義思想研究という枠組みでもって論じられてきた領域に、教師集団としての超越主義者たちならではの教師教育の実践-哲学を抽出することを目指す。そのようにして抽出された教師教育の実践-哲学から、今日の我が国における教師教育の議論を特徴づけている課題である、協働・学び合いといった事柄への示唆を得ることを試みる。

言い換えると、本研究は次のような問いにおいて展開される。「エマソン、ソローをはじめとする超越主義者たちを教師集団として指定した際に可能となる、超越主義研究・教師教育研究への新たな視野は、現代日本の教師教育の課題である、教師の協働・学び合いについて、どのような示唆をもたらすだろうか。」

### 3. 研究の方法

本研究は以下の3つに概括される研究方法を用いて取り組まれることが目指された。

- (1) 教師集団としての超越主義者の特質を、エマソン、ソロー、ホイットマンらの著作と関連研究の分析を通して、超越主義者同士の相互教育の思想として析出する。
- (2) 19世紀米国知識人の協働・学び合いの場が、米国マサチューセッツ州コンコードをはじめとするいくつかの拠点において、いかにして形成されたのか把握する。
- (3) 上記二点をもとに、教師間の協働・学び合いを促進する視点を抽出し、現代日本の教師教育への示唆を提起する。

以上である。

研究期間がコロナ禍とほぼ重なり、海外での実地調査や、国内外での対面の聞き取り調査等が困難となる状況に直面したものの、上記(1)～(3)の研究方法について、以下の<1>～<3>のアプローチを採用して遂行した。

- <1> エマソンの自然概念が、教育思想の歴史においていかなる特質をもつものであるかについて吟味を行い、ソローをはじめとする同時代人との関連性の明瞭化を図った。
- <2> 米国の教師教育研究を手がかりに、教師の知識の形成について理論的整理を行なった。
- <3> 現代日本の教員養成の課題と教師の知識の形成の議論とを照らし合わせることで、今日の教師教育を再検討する文脈の解明に取り組んだ。

以上である。

### 4. 研究成果

- [1] エマソンの自然概念を、西洋教育思想の歴史的な文脈と照らし合わせ、その独自性を論じた著作を出版し、エマソンら超越主義者の教育思想が現代の教育問題に対して有する可能性をひろく国際的な学術共同体に発信することができた。
- [2] 英米哲学における知識論の系譜と、米国等の教師教育研究の蓄積とを交流させることを通して、教師教育における知識概念の再検討を行い、理論知と実践知の対立構造を問い直す視座を著作において提起することができた。
- [3] 現代日本の教員養成の課題を、教師の知識の形成という視点から吟味し、今後の日本の教育界を担う世代へ向けた発信を出版を通して行うことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高柳充利	4. 発行年 2023年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 12
3. 書名 「教師が学ぶとは」青木一・森下孟（編著）『教師をめざす人のための臨床経験の理論と実践：「臨床の知」が拓く教員養成課程』	

1. 著者名 Mitsutoshi Takayanagi	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 17
3. 書名 "Nature and Education" in: M. Ueno (ed.) Philosophy of Education in Dialogue between East and West: Japanese Insights and Perspectives	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------